

## 家と家族

— 思い出は何のためにあるのか

後編

さとうこうじ

## 佐藤浩司

(建築人類学・建築史学、国立民族学博物館)

インターネットやユビキタスといったテクノロジの登場により人間関係のありかたにも大きな変化が起こり始めている。家とそこに住む人を建築人類学という独自の視点で研究し続けている佐藤浩司氏を訪ね、その研究から見えてきたものについて語ってもらった。

聞き手

たむらかすみ  
田村和彦

(関西学院大学教授・関西学院大学出版会編集長)

## 【個人化するヒストリー】

**田村** 佐藤さんが今とくりくまれているユビキタスの研究会などで、自分の見たものを全部何十万枚という画像ファイルに取り込んでいくという面白い実験をしている人のことが紹介されていますね。

**佐藤** 美崎薫さんね。彼は記録魔なんです。見えるところに何も置きたくないと言っていて、自分の見たモノを全部スキャナで取り込んで、取り込んだモノは捨ててしまふんです。そうして取り込んだ画像を毎日二秒に一回で見えていって、一周するのに一ヶ月くらいかかる。

**田村** その話がある人にしたら「それは記録じゃないか」と言うんです。記憶と記録と思いはどう違うんでしょう。

**佐藤** 記録は記録でしかない。思い返すことによって初めてその個人にとつての価値が生じてくる。記録という次元で言えば、個人が一生の間に見たり聞いたりしたものは全て記録できるそうです。何

べタバイトか、たいした量ではない。でもそれやってみるとどんな意味があるのかって話になるんですよ。そんなもの蓄積していつて何か意味があるのかって。ないような気もします。しかしまさにそこが私が戦略的に取り組んでるところで、個々の人間が全て自分のことを記録し始めたときに歴史が変わると思ってるんです。将来の歴史学者が現代の歴史を書こうとするとき、ひとつのストーリーでは、たぶんもう書けない。昔は限られた数の記録だけを集めて、ひとつの国の歴史とか社会の歴史が書けたと思いますが、現代のような、全ての人間が自分の日記まで公開するような世界になったら、そういう統一的な歴史はもう書けない。たとえそういう歴史があったとしても、それが自分の人生にとつてリアリズムをもって理解されるような環境にはならないと思うんです。まさに個人が自分の思い出を頼ることでは、自分とは何かかわからない時代が将来くる。それで「思

い出」なんです。社会の歴史は一種のイデオロギーですから、そこを覆していくための戦略として思い出をとらえているんです。

**田村** 記憶というのは歴史学でも言われています。ピエール・ノラ編の『記憶の場』とか。アンダーソンが『想像の共同体』をつくる上での記憶づくり、大衆的な記憶づくり、あるいは公の立場からの記憶づくりをとりあげて以来の動きです。建築もその中に取り込まれてきたわけですよね。

**佐藤** 建築家はまさにその記憶づくりに関立っていた。ある空間の中で濃密な社会を築かなければいけないという、一種のイデオロギーというか、幻想のもとにそれをやっていた。そこを覆して否定してしまえば、ある空間的な国境という中にいる人間が、無理をしてひとつの目的を持って生きる必要は全くない。現実日本という国の中にあるのは、ある価値を共有している人たちがかりではないの

だし、そういう多様な人間が集まって国家というものができていて、国家についての目的は価値の共同体ではないということ素直に認めればいい。今までは全く別な、ルーズな共同性を求めていけばいいだけだと僕は思っている。

ら、無理してそれに従う必要はない。むしろ必要なのは「いかに生きるか」とか「自分とは何か」を知るための手段でしょう。それが「思い出」とか、モノの価値を見いだしていくところから開けていかないかなと思ってるんです。

## 【ユビキタス社会】

**田村** 国境や国家の越えかたということにもなるんでしょうけれど。

**田村** ユビキタス社会はテクノロジに全部支配されてしまうような管理社会として捉えられることが多いのですが。

**佐藤** 僕はまず個人の領域で切り崩していこうとしていて、だからこそ「2002年ソウルスタイル」展をやったような、冷蔵庫の中のを調べたりとか、とんでもなくつまらないところから崩しにしていこうとしている。

**佐藤** ユビキタスの開発に携わっている人たちは、ユニバーサルな社会イメージをもっているけれど、僕らは「そうじゃないでしょ」と言おうとしている。ユビキタスになったとたんにモノの価値はとんでもなく多様になるはずですよ。ユビキタスはそれを受け入れるようなテクノロジですから。インターネットがユニバーサルだと思われていたのが、こんなに

個人化して、マイクロ・ヒストリーみたいなものにしていくんですね。

個人化して、マイクロ・ヒストリーみたいなものにしていくんですね。

※思い出はどこに行くのか？

— ユビキタス社会の物と家庭にかんする研究会 <http://www.yumoka.com/>

なものの対極にあるんじゃないかって思うんです。

### 【空間と人間関係】

**田村** 以前読んだ本(Margaret Wertheim

『The Paraly Gates of Cyberspace』1999)に書かれていたのですが、インターネットの中では、身分、国籍、肌の色、ジェンダーといったものが全部消え去って透明な人格として存在できる。さらにそれを突き詰めると、生きていくことと死んでいくことの差もなくなる。バーチャルな空間の中で相手にとっては自分の不死というものを実現できると思っている人も真面目にいるという話がでてきました。

**佐藤** 人間の親密度を測る基準でいうと、親密な人たちの間では不死であることはできると僕も思いますよ。しかし現実にはその人と同じ空間を共有している人たちにとってはやっぱり死ぬわけです。死体の始末はしなければいけないし、歳をとったら介護しなくてははいけないし、

現実的な問題がある。空間的な人間関係をどうするかが問題だというのは、こちらに注目しましょうということをしているのです。

**田村** 空間が全くなくなってしまうわけはないですすね。

**佐藤** 肉体を持つている限り空間はなくなる。空間を共有している人たちとどういう関係を築くかは別の話として残る。かつてそれは同じもの、パラレルなものと思われていましたが、そうではなくなってきたのだから、むしろ空間的なことをどうするかが大切だろうと思っているんです。

**田村** インドネシアの住居の話の中でも死というものがでてきましたが、家という空間の中で死という物語をどう処理するのかは、今までもずっと問題になってきたわけですよ。

**佐藤** 農耕民なら人が死ねば儀礼をおこなって家の中で祀ってきたし、狩猟採集民なら家や集落を捨てて逃げることで処

理してきた。現代のネット社会だったらネット葬儀なんかもあって、それが実現できてしまう。いわゆる「バーチャルとリアルな世界」という対比ではなく、主張したいのは「空間と人間関係はパラレルではなくなった」それだけだと思っっているんです。単に空間から離れた人間関係のことをバーチャルとよんでいるとそれはとてもないことで、空間を離れた人間関係で我々は生きていくわけだから、むしろ空間的な人間関係をどうするかが大きな問題でしょう。建築はあくまで空間的な人間関係を築くところですから、そこに関わっているんですよ。

### 【アスタルジーについて】

**田村** 少し前、ドイツでは東ドイツ・プルームのようなことになっていました。ノスタルジー(郷愁)とオスト(東)をひっかけてオスタルジーといって。東西の壁が壊れてからもう十四、五年になります、それが以降あまり格差は埋まらない。

けれど東のほうが懐かしいという話になりかけている。日本でも昭和三十年代ブームがあったりしますが、あまり人間が創造のほうに向かっていない。懐古に傾き、私的な記憶のほうに関心が集まっています。のかなと思うんですよ。

くんです。生き甲斐を持つてくる。今までは昔話をするのはいいことではなくて「おじいちゃん、そんな昔のことはかり言つてないでもつと将来のこと言いなさいよ」って、そういう言いかたをしてきた。それは、個人の思い出とか個人の歴史を語るのとはつまらないことで、個人のことやわかって何の価値もなくて、社会とか国家のことを考えたり言ったりしましょうというのと同じですよ。ノ

スタルジーは個人の思いを語ることで、自分が

「自分にとって大切なものは、自分にとって大切だ」と認めることです。

みんな何となく罪悪感を持ちながら自分の思いを語ったり日記を書いたりノスタルジーに浸つたり

してはいますが、実はそうではなくて「それがいいんじゃないの」と言っ

しまう。それが冷蔵庫の中の調査※とたぶん結びついていると僕は思っているのね。そこから切り崩していかないと「社会の語り」というのを脱することができない。個人にとつてそれが大切なことなんだから素直に大切と思えばいい。何も無理して社会的な語りを身につけなくても、いいのではないかなと思っ

ています。

**田村** 僕はむしろ自分が歳をとつたためだと思っ

たと思っ

たと思っ

たと思っ



▲佐藤浩司(さとう・こうじ)  
国立民族学博物館助教授。建築人類学・建築史学。1954年東京生まれ。『シリウス』(学芸大出版)など。

たと思っ

たと思っ

※国立民族学博物館の特別展「2002年ソウルスタイル」では、韓国ソウルの家庭にあるすべてのものを調査した。最初に行われたのは冷蔵庫の中のモノをすべて取り出して一個一個写真を撮る作業だった。

http://www.ninpmk.ac.jp/special/200203/